東京機械鐵工同業組合の大塚鐵工場主大塚氏、桑名鐵工場主桑名氏、日本軌道株式會社の小溝氏等の有力なる工場主は廿四日午后鐵道協會に於て怠業、罷業の對抗策の協議會を開いたが議論百出し――工場閉鎖を斷行すべしとか、張本人を互に

◇通報して使用を禁ずべしとか異論もあつたが工場閉鎖は社會に影響を及ぼす事が多大であるし張本人を使用しないとすれば人格問題となるからとの反對論が出で結局次の會に於て議決することになつた、此會で一般工場主の落合つた議論は「勞働組合は早く組織した方がいゝ、其の組合を作るに就いては何等か内務省に陳情の方法を取らうぢやないか」といふのである、資本家が勞働組合を認めるといふ議論は興味ある問題である、大塚桑吉氏曰く「現在の罷業は中心統一がない、職工

◇代表者に會つても話は少しも纏らないで工場主及び社會の迷惑する事が夥しい、若し茲に大規模の勞働組合があつて職工自身の要求を職工各自が討究して其組合の幹部が相當と認めた上で工場主に要求し、而して容れられない時は罷業をするといふ事になれば穩當だと思ふ、さうなれば工場主もよく其の要求を研究して相當の要求は容れなければならない事になる、然し乍ら目下政府では勞働者の縱斷組合は許すが橫斷組合は許さないといつてゐるがそれは時代に

◇適應した處置ではないと考へる、我等工場主でさへ低に規則正しい橫斷組合成立の必要を認めてゐるのである、組合對工場主とされば罷業しても怨い感情が殘らないで濟むから――」云々。

斯くの如く、昨日迄で縱斷組合を主張した資本家が、今日は橫斷組合の必要を主張するに至つた。確に勞働運動の進化であると思はれる。

亦た、技友會幹部は事件終結後悔むべき官權の爲めに捕はれの身となつた。誠に氣の毒な事である。友愛會員は、彼等の爲めに同情金を出資する事を惜まなかつた。

昨日迄で罵言讒謗の中を來た、我等同志は其れに對する何等反感も持たず、彼等に對する同情の涙は一層熱かつた。

更に勞働者は只騷いでも駄目だと云ふ事を知つた資本家は、專門の學者（社會學者、經濟學者等）を自己の膝下に集め、勞働者の戰術に對抗すべき總ゆる事を研究して居る。三菱には、社會問題調査部がある。三井にも、久原にもあるであらう。

勞働者よ、お前達の固守した第一期の戰術を捨てよ。資本家の戰術は、もう二期にも三期にも入つて居る事を知らなくてはならない。

それにしても愉快な事であつた。技友會諸君も、戰に敗れたとて泣くものではない、